

2017年度第6回物学研究会レポート

「日本の現代アート事情 — ヴェネツィア、  
カッセル、ミュンスターを巡って思うこと」

山口裕美 氏

(アートプロデューサー、YY ARTS 代表)

2017年9月6日

BUTSU GAKU  
物学研究会  
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

「アート」と「デザイン」が自由に越境する今日、アートの動向はデザインにも大きく影響しています。今回は、「現代アートのチアリーダー」の異名をもつアートプロデューサー山口裕美さんから、世界の名だたる現代アートの国際展、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクトの最新情報を中心に、日本の現代アートの現状と未来についてお話しいただきました。

以下、サマリーです。

## 「日本の現代アート事情 — ヴェネツィア、カッセル、ミュンスターを巡って思うこと」

### 山口裕美氏

(アートプロデューサー、YY ARTS 代表)



01 : 山口裕美氏

#### ■現代アートのチアリーダー活動

山口 みなさん、こんばんは。今日はヴェネツィア・ビエンナーレ、カッセルのドクメンタ、ミュンスター彫刻プロジェクトの話と、日本の現代アートの事情、そして私が来月総合プロデューサーをやることになった静岡県掛川市の「かけがわ茶エンナーレ」について説明させていただきたいと思っています。

まず、私の仕事を簡単にご紹介します。ひとつはジャーナリストとしての仕事で、最近では『観光アート』（光文社新書）という本を出版しました。美術館には、目玉と呼ばれる作品以外にも、見逃してはいけない渋いコレクションがあるのですが、その情報が知られていない。それはもったいない、ということで本にまとめたものです。もうひとつはプロデューサーとしての仕事で、商品開発や審査員、イベントのディレクションなどを行っています。現代芸術振興財団では、CAF 賞という学生向けのコンペティションを3年間やらせてもらって、枠組みを作りました。また、金沢市にある福光屋さんでアーティストのミヤケマイさんと一緒に、ひょうたんの形をした「六瓢息災」の縁起徳利をつくったりしています。

ほか、NPO 法人芸術振興市民の会の理事長をやっているのですが、そこではゴールデンアクリックスというアクリル絵の具のメーカーと一緒に、メディウムレクチャーをやっています。絵の具は究極のナノテクで、今までできなかった表現ができるようになった、あるいは昔よりも簡単にできるようになった、ということがたくさんあるので、美大を卒業して10年、20年経ったアーティストたちにとっても喜ばれています。また、このNPOでは、日本の現代アートに貢献した方に「TOKYO PRIZE」という賞を贈る活動もしています。

## ■展示に関わる2つのキーワード

2017年は、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2年に一度）、カッセルで開催されるドクメンタ（5年に一度）、ミュンスター彫刻プロジェクト（10年に一度）の開催が一度に重なる貴重な年です。まず初めに、キーワードを2つお伝えしておきたいと思います。

ひとつは、大ベストセラーになっているユヴァル・ノア・ハラリ著の『サピエンス全史』。久々に欧米で大ヒットした歴史書でもあり、哲学書でもあるのですが、日本でもようやく翻訳版が出ました。この本は、さまざまな人に影響を与えておりまして、今回のヴェネツィアもカッセルもミュンスターも、サピエンス全史を読んでいるかいないかによって、相当受け取り方が違ってくると感じております。

もうひとつは、「スペキュラティブ・アート」です。これは、考えさせる、問題提起をするアートということなんですね。謎だらけの作品を、受け取った人がそれぞれ考え、応用したり、展開したり、刺激を受けて次のステップに進んでいく。このようなものを「スペキュラティブ・デザイン」「スペキュラティブ・アート」と言うのですが、これが今後の現代アートの主流になっていくだろうと思っています。そして、まさにドンピシャな長谷川愛さんというアーティストがいるので、後ほど紹介します。

## ■57回ヴェネツィア・ビエンナーレ

ヴェネツィア・ビエンナーレは1893年にスタートして以来、今回で57回、122年目になります。参加国は過去最大で86カ国、自主企画は23以上ですから、本気で見るのであれば長期滞在しないと無理です。メイン会場は二つ。一つはジャルディーニという公園を会場に行われるもので、30カ国だけが独自のパビリオンをもっています。日本は1952年、横山大観以下11名で参加したのが最初で、1954年には建築家の吉阪隆正さんがつくった日本館ができました。もう一つは、アルセナーレという船のドックヤードを改装した会場で、総合キュレーターのクリスティーヌ・マセルさんの自主企画「Viva Arte Viva（芸術万歳）」に、125人のアーティストが参加しています。そのうち103人が初参加で、ほとんどが無名です。このことからわかるように、今回のヴェネツィア・ビエンナーレは非常に資金不足で、プレス向けの入館証すら用意されないという状態でした。

## ●日本館「逆さにすれば、森」

日本パビリオンのキュレーターは、鷺田めるろさん（金沢 21 世紀美術館学芸員）です。アーティストは岩崎貴宏さんが選ばれ、「Turned Upside Down, It's a Forest / 逆さにすれば、森」というテーマで展示をしています。ヴェネツィアは魚のようなかたちをしている浮島です。これを逆さまにすると、海に突き立てた杭でいっぱいになります。つまり、この「逆さにすれば、森」というのはヴェネツィアのことなんですね。

岩崎さんは、雑巾から糸を取り出して作品にするというような面白いものをつくられる方です。日本パビリオンのネームプレート「GIAPPINE」の「E」のところに、赤い靴下が掛かっているなどと思ったら、やはりこれも作品でした。また、安芸の宮島のような建物を逆さまにしたり、サン・ジョルジョ・マッジョーレなどヴェネツィアの方に馴染みのあるものもたくさんつくっていたので、評判はとてもよかったように思います。ただ、予算がないため、新作ではないんですね。ヴェネツィアは晴れの舞台なので、新作を出す人が多いのですが、岩崎さんは鷺田さんと相談して、いくつかは日本で発表したことのあるものを持っていったそうです。

## ●金獅子賞作品（ドイツ館）

ヴェネツィア・ビエンナーレは、誰もやっていないことをやるためには、何をやっても自由、そして目立てばいい、という風潮がずっと続いていて、なかにはそこに美を見つけるのが辛いようなものもあります。今回の金獅子賞は、ドイツパビリオンのアンネ・イムホフが受賞しました。タイトルは「ファウスト」。パビリオンの床全体が強化ガラスになっていて、その下に作品が置かれ、よく見ると犬の首輪を付けられた人がいたり、裸になったり、ドーベルマンに追いかけられたりするパフォーマンスが行われているんです。これが「過激で荒々しい」「力強くかき乱す」と評価されました。パフォーマンスアートとして、このような展示は誰もやっていないという点では面白いのかもしれませんが、私はどちらかというともっと違う作品が見たかったですね。

## ●ダミアン・ハースト+フランソワ・ピノー

こうした予算不足のヴェネツィアを、あざ笑うかのような豪華な展示をやっていたのが、問題児として知られるダミアン・ハーストです。彼は、LVMH の創始者フランソワ・ピノー氏をスポンサーにして、プンタ・デッラ・ドガーナとパラッツォ・グラッシの 2 会場で「難破船アンピリーバブル号の財宝」と題した個展を開催していました。「海中深くに沈んでいた自分の作品が、今引き上げられた」というフェイクストーリーに基づいて作品をつくっているんですね。これらの作品に使われた金や宝石はすべて本物で、76 億円もの費用をかけているそうです。実はこの展示には、フランソワ・ピノー、ダミアン・ハーストのほかに、ラリー・ガゴシアンというガゴシアンギャラリーのオーナーも絡んでいます。この 3 人が結託しているので、初日の時点ですべての作品が売約済みでした。あんなに汲々としていたヴェネツィア・ビエンナーレとは全然違います。人から「どれを見たらいいですか？」と聞かれたとき、ダミアンの展示はヴェネツィア・ビエンナーレ本体を見た後に行ったほうがいいですよ、逆に回るとヴェネツィアがしょぼく見えるので、順番だけ間違わないように、とアドバ

イスしました。

## ■ドクメンタ14

ドクメンタは5年に一度、ドイツのカッセルで開催されてきましたが、14回目の今回は、歴史上初めてカッセルのほかにギリシャのアテネでも行われることになりました。キュレーターはポーランド出身のアダム・ジムジック（クンストハレ・バーゼル館長）で、テーマは「アテネから学ぶ」。ステートメントには「西洋美術史はギリシャから始まった。もう一回ギリシャから学ぶことを考えよう」というようなことが書かれているんですが、その背景には、ギリシャの経済危機の本当の犯人はドイツではないかと言われていることや、難民問題というEU全体が抱えるシリアスな問題が関係していると聞いています。そのため、政治的な作品がとて多く見られました。

みなさんは、2014年5月、ナチスの強奪美術品1280点を保有する男性が死去して、ドイツ政府が来歴調査をする、というニュースが大きく取り上げられたのをご存知でしょうか。アダム・ジムジックは、ドクメンタのキュレーターに指名されたとき、この発見された作品をメイン会場のフリデリシアヌム美術館に飾ると宣言していたんです。ところが実際はうまくいきませんでした。

このメイン展示の計画が実現できなくなったことから、アテネの美術館のコレクションとカッセルのコレクションをエクステンジするというプログラムを行うことになったのですが、現代アートの視点で見ると、アテネにはあまり面白いものはないんですね。一方、カッセルはドクメンタの蓄積がある。それを一方的に貸し出すのは反対だという意見があったり、逆に棚からぼたもちのような展示になったアテネの方でも、地元の人たちが反対運動をしたりと、非常に難しい問題をはらんでいました。その重苦しい感じが作品にも出ていて、とにかく今年のドクメンタは暗い感じでした。

## ●ポリティカルな作品のオンパレード

今回の会場はカッセル近郊を含めて30カ所、160人以上のアーティストが招聘されていますが、日本人アーティストは一人もいません。フリデリシアヌム・プラッツという広場には、その年の象徴的な作品が展示されるのですが、今回はマルタ・ミヤヒンの「Parthenon of Books」という、世界中の発禁本10万冊を使って建てた、ギリシャのパルテノン神殿風の作品でした。

ただ、よく見るとハリー・ポッターやアンネ・フランクの日記など、発禁になったとは聞いたことがない作品や、同じ本が何冊もダブって展示されているんです。発禁本をやるというんだったら、もっと気合を入れて世界中から探して来るべきなのに、これではコンセプトがブレブレです。

これは北欧の作家（マレット・アンネ・サラ）の作品なのですが、これはトナカイの首です（トナカイの頭骨をカーテン状に吊るしたもの）。そして作品とともに歴史的な資料を展示

して対比させるというものです(北欧の原住民サーミ族が、トナカイ飼いの頭数制限に対し、膨大なトナカイの頭骨を積み上げ抗議している写真)。このように、歴史的な事件をもう一度喚起させる作品など、ひじょうにポリティカルなものばかりで、明るくてポップでかわいらしいものがないんですね。

そんななかで一息つけるのが、ヨーゼフ・ボイスの特別展示でした。彼は何度も死にそうな目に遭って、オオカミに助けられたりした経験から、毛布などに対する執着心、感謝の気持ちというものが強く、彼の作品には分厚いフェルトや、脂肪などが出てくるんです。それが本当に今見ても色あせてなくて、私はこの展示が一番よかったなと思っています。かつてボイスはカッセル市内に、7000本の樫の木と石を等間隔に置いて植樹をしたんですね。それすらも知らない若い世代がたくさんいます。ドイツ人の学生ボランティアにヨーゼフ・ボイスの部屋はどこ、と聞いてもわからなかったのは衝撃的でした。

### ●ドクメンタを見終えて

市原研太郎さんという美術評論家の方は、「理念を創出した虚無の荒野に生きることが日常となっているのは日本だけだ」と言っています。ドクメンタに出しているヨーロッパの人は、理念の創出をしているんだけど、それは日本の中では日常的にあることじゃないか、つまり日本は未来なんじゃないのかと。私も2008年に出版した『クールジャパン』の中でも、「日本は世界の未来である」と書いているので、この市原さんの話は非常に共感できるものでした。

ヴェネツィアが非常に商業的であるのに対して、カッセルのドクメンタは、商業的にはなくても素晴らしいものを選ぶという信念のようなものがあつたのですが、今年のドクメンタは、主催者の思惑とアテネの思惑、さらに参加アーティストの世代間の違いもあって、いろいろなかたちで相当ブレてしまっているな、というのが私の印象です。

### ■ミュンスター彫刻プロジェクト

ミュンスター彫刻プロジェクトは10年に一度の開催で、今回が5回目になります。このイベントの発端は、ミュンスター市がジョージ・リッキーの彫刻作品を設置したところ、市民から反対運動が起きたことでした。そして、政府と市民の両方の意見を聞くために呼ばれたのがキュレーターのカスパー・ケーニヒでした。彼は、リチャード・ロング、ドナルド・ジャッド、クレス・オルテンバーグなどアメリカン・ポップ・アートをたくさん呼び、パブリックアートをプロデュースします。やがて市民に現代アートが理解され、今では大歓迎ムードになり、会期の4ヵ月間に世界中から約50万人が訪れるイベントになりました。

これが非難轟々だった、ジョージ・リッキーの「三枚の正方形」という作品です。今見ると、なぜそんなに反対したのかわからないくらい普通の作品なんですね。1977年当時は、公園や美術館の庭には設置できず、日の当たらない駐車場に置かれていましたが、今では、美しい公園の一角に記念碑的に展示されています。

アート作品の中には、一般の人が見て面白くないと思うもの、あるいは面白い面白くないかさえも判断がつかないものがあります。それは、市民の声を吸い上げなかった美術関係者の責任かもしれませんから、このように、市民の方と自治体と話し合いの場を持てたことは、とても幸運なことだと思います。

### ●次世代のトレンドはスペキュラティブ・アート

ミュンスターには二人の日本人が参加していて、その一人が荒川医（あらかわ・えい）さんというニューヨーク在住の方です。LED でセザンヌなどの名作を点描のように映し出し、それが音楽に合わせて点滅するという作品なのですが、野外の展示のため1作品盗まれてしまったことでも話題になりました。

これは、私が好きなヒト・スタヤルという作家の作品です。AI が進化したらどうなるかということを前提にした作品で、人間がロボットを後ろから蹴って倒したり、最後の1個を積み上げていよいよ完成というタイミングでそれを破壊したり、徹底的にいじめるんですね。すると、最初は笑って見ていたのに、次第にロボットに感情移入して、悲しい気持ちになる。彼女の作品は、現代社会の中の本当に小さい落とし穴のようなものを突いた、まさにスペキュラティブな作品なんです。もしかしたら、みなさんのような特別な知識をもっている方は、なるほどこのロボットはこの部分が弱いのか、ここを突くと倒れたり壊れたりするんだ、と受け止めるかもしれません。今後は、この手の作家がトレンドになることは間違いないと思っています。

もう一つ面白かったのは、CAMP という2人組のユニットの作品で、壁にあるスイッチを押すと、通りを挟んだ向こう側に窓から女の人が手を振るんですね。こちらでも手を振ると、いきなりシャッター音が聞こえて写真を撮られる。つまり、監視カメラや、監視社会を喚起させる作品になっています。

### ●肉体を通じて感じることの大切さ

これは、映像作家として知られるブルース・ナウマンという方が30年かけて実現した2007年の作品で、大学の敷地に25m×25mの逆ピラミッド型の凹み（最大の深さ2.3m）をつくっています。斜面を下りて一番深い真ん中まで行くと虫のような視線で地上が見えるんですね。この作品で彼がやりたかったことは、肉体を通じてものの見方が変わるということ、若い学生たちに体験してもらうことだそうです。

アートというのは、分かりにくかったりコンセプトが難しかったりするものですが、肉体を通じて感じるということも大事な一面です。たとえばオーケストラが作曲家の意思を譜面を通じて感じ取って、それを再現するのと同じように、アーティストの意思を肉体を通じて再現するというのも、鑑賞するときにとっても必要なことだと思います。

## ■日本の現代アートの可能性

いろいろな大規模国際展を見て思うことは、なぜ日本人アーティストは選ばれないのか、ということです。日本人アーティストの作品は優れているし面白い。はっきり言ってアンダーバリュー、つまり値段よりも価値があるのに、残念ながらサポートが少なく、海外への発信力が弱い。けれども日本全体として見た場合、相当魅力のある国だと思うんですね。2004年に書いた『COOL JAPAN』という本の中で「日本は世界の未来である」と書いたのですが、今回のヴェネツィア、カッセル、ミュンスターに行き、同じことを感じました。

現代アートの魅力は、自分が生きている時代を総括した同時代性と、少し先の時代の空気を提示する未来性があることです。「坑内のカナリア」という言葉は、長らく文学者の枕詞でしたが、私は現代美術の作家たちのほうが坑内のカナリアなのではないかと思っています。そして作品を見る側は、物差しのない世界での判断力と想像力が求められるので、この2つの力を同時に鍛えることができます。

今、私は経営コンサルタントの方と一緒にあるプロジェクトをやろうとしているのですが、その方が言うにはアートはビジネスマンにこそ必要だと。そういうタイトルの本も最近出たようなのですが、富裕層の方、時代をリードする方がアートを知らないのは、もったいないと思います。今日いらしているみなさんには、ぜひ現代アートの理解者になっていただきたいと思います。

## ■かけがわ茶エンナーレ

今年の10月に静岡県掛川市で開催される「かけがわ茶エンナーレ」というイベントの総合プロデューサーをやることになりました。私が提案したのは次の3つです。

### 1) 外国人アーティストを招聘せず、日本で活躍するアーティストを選ぶ。

瀬戸内国際美術祭でも、越後妻有アートトリエンナーレでも、有名な外国人アーティストを人寄せパンダ的に呼ぶことに、予算の大半を使うことが多いんですね。一方で、日本の作家はみんな一律で宿泊費や交通費は自己負担。エントリープログラムという言い方をして、キャリア、年齢、男女比も関係なく、エントリーをしたら選ばれるので、非常に低予算なんですね。当然予算をかけた方がダイナミックにできますから、海外の人の方がいいよね、ということになってしまうんです。税金を使うのに、こんなことがありなのかと長年思っていました。掛川の予算は本当に微々たるものですが、日本人だけでやりたい。外国人は呼ばない、パンダはいらない、ということにしました。

### 2) 地元の大きな産業で名産でもある掛川茶と現代アートをつなぐためにテーマを「喫茶去(きっさこ)」にする。

掛川茶は深蒸し茶で、NHKの「ためしてガッテン」という番組で、健康茶として取り上げられたこともあります。静岡県内でも深蒸し茶をつくっているところは何箇所かしかなくて、

そのうちのひとつが掛川茶なのですが、なかなか宣伝がうまくいっていない。そこで掛川茶を健康茶としてもう一度押し出し、アートとつなげるために「喫茶去」をテーマにしました。「喫茶去」というのは、唐の時代の禅宗の趙州和尚が、誰に対しても分け隔てなく「喫茶去（お茶を召し上がれ）」と言って一杯のお茶で公平なおもてなしをしたという逸話から来ているものです。

### 3) 「何がアートで、何がアートでないのか問題」を議論して、それぞれが考える。

先ほどお話しした通り、一般の人がわからない、いらぬものが美術館に入っている、というような現代アートのそもそもの問題を、この機会にディスカッションしたいと思っています。

掛川市近隣の出身のアーティストを選定するなかで、冒頭でお話しした長谷川愛さんが掛川市出身だということがわかりました。彼女は、岐阜のIAMAS（情報科学芸術大学院大学）の出身で、その後ロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツに行き、さらにMITで学生および研究員として働いていたこともあるという人物です。最先端の学問と、自分の表現を合わせて問題提起をするというスペキュラティブ・アートの最前線にいる方だったんです。例えば女性がプールでイルカを産んでしまうという遺伝子組換えの話とか、女性同士の結婚で子どもが生まれるとか、そういうものを行っている方なので、掛川市の方はびっくりすると思うのですが、故郷に錦を飾っていただこうと思って彼女を呼びました。

「かけがわ茶エンナーレ」というタイトルは、地域創生の予算をもらうために市役所の方がつくった言葉なので私が決めたものではありません。ビエンナーレは2年に一度、トリエンナーレは3年に一度ですが、茶エンナーレとはなんなのかということが曖昧で、しかも「茶エン → 茶園 → 茶畑で展示する」と思われてしまったんですね。それで、お茶と現代アートをつなげるとしたら「喫茶去」だということになりました。

また、掛川市は東海道の街道筋にあるので、江戸時代から東海道を行き来する旅人をおもてなししてきた歴史があります。さらに、大日本報徳社という二宮尊徳の「報徳の教え」を広めるための全国組織の本社が掛川にあるんですね。「経済と道徳が調和した社会」というのはとてもいいメッセージなので、こちらの大講堂を中心に、掛川城御殿の大広間などを会場にして展示することになりました。

今回は、お茶をテーマに何かをするというのではなく、おいしいお茶を一杯飲みながらいい作品を見てもらうというかたちで、逸話のようなおもてなしを実践したいと思っています。お時間のある方は、ぜひお越しいただければと思います。

■かけがわ茶エンナーレ(<https://www.chaennale.jp/>)

開催日：2017年10月21日(土)～11月19日(日)

会場：静岡県掛川市（原田・原泉エリア／東山・日坂エリア／五明エリア／まちなかエリア／横須賀エリア／大東エリア）

## ■フィクションの先にある幸福

最後に、冒頭で紹介した「サピエンス全史」が、どうしてこれらの美術展のキーワードなのかということをお話しします。この本は、端的に言ってしまうと「たくさんある種の中で、人間が生き延びられたのはどうしてか」ということが、2冊の長い文章の中で述べられているのですが、その理由は「フィクションを信じることができたから」という一言に尽きるんですね。たとえば貨幣もそうですよね。みんなが同じ価値があると信じているからこそ成り立って、資本主義が成立している。では、次の新しいフィクションをつくるには何が必要かと言えば、私たちが目指すのは間違いなく「幸福」だと思うんですね。つまり、次のフィクションを信じるための、フィクションの先にある幸福です。多様化の時代ですから、幸せの価値観はさまざまでしょう。けれども、何が幸せなのか、何が幸せでないのか、ということ想像しながら研究したり開発したりする必要があると思うんですね。

市原研太郎さんがおっしゃっているように、概念を創出した虚無の荒れ地に生きることが、日本人は日常になってしまっているから、日本の姿は世界の未来であるかもしれない。そして、今欧米が動揺していることは、私たちにとってはすでに経験していることなので、その解決策や方向性を日本人がリードすることができるかもしれない。こうしたことは、サピエンス全史に書かれていることと合致するんです。大ベストセラー本ですから、ヴェネツィアのコミッショナーやドクメンタのキュレーターが読まないはずがありませんし、読んでいることを前提とした展示だと考えると、私はフィクションの先に幸福があるのではないかと、思っています。

ご清聴ありがとうございました。

**関：**ありがとうございました。次に質疑応答に入りたいと思います。

**Q1：**発表当時は完全に凡庸なものだとされて、何の話題にもならなかった作品が、あるとき急に発掘されて、実はあの人はとんでもないことをやっていたんだ、と評価されるような事例はあるんですか？

**山口：**そのときは評価されないけれども、今は憧れる人がいっぱいいるとか、そういうことは非常にあると思います。ヨーロッパやアメリカは表舞台に相当出ているので、それができるのですが、日本がヴェネツィア・ビエンナーレに初参加したときに、横山大観ら11名がどんな作品を出したのか、記録写真すらすべては残ってはいないんですね。日本の現代美術は終わってるよ、という声をよく聞きますが、まだまだ日本のアートは発進すらしていないんじゃないかと思っています。ですから海外の人に会うと、日本のアートを紹介するんですが、これがたった50万円ですよ、と通販番組のように言うと5千万円の間違いじゃないのか、と言われてたりするんです。

お金の話が出たついでに言っておきますと、2015年の1月に税制が変わりまして、それまで20万円未満のものしか免税の枠がなかったのですが、今は100万円未満のものに免税の枠が広がったので、大儲けしている人はアート作品を買っていただくといいと思います。

家具などと同じように8年間減価償却ができます。個数の制限はありませんので、有効に使って社員のためのコレクションができますし、もしかしたら個人で買われると孫の世代、2~3世代の間に50万円で買ったものが5千万円になることは難しいことではないと思います。

アートを投資という言い方をすると嫌な顔をされるかもしれませんが、前向きな投資として考えるのは大事なことで、日本だけが毛嫌いしているんですね。美大には、売り絵を描く奴はバカだと教える教授がいますが、21世紀とは思えません。アーティストは作品を売らず、どうやって食べていくのかと。建築家だったら建築をつくってそれをお金にしますよね。才能をお金の糧にする方法をきちんと正当化すべきだと思いますし、その中には投資目的で作品を買う人がいてもいいと思います。

**Q2:** スペキュラティブ・アートのように、作品が示す未来性、問題提起をすることが目的のアートの場合、どのように値付けされたり、評価されたりするんですか？

**山口:** 例えばインスタレーション作家の場合、長年考えて作り上げた1つのアイデアを誰かに売って終わりでは困るので、エディションを作って販売します。例えば美術館で展示したプロジェクトを少し縮小した形にしたものを、エディションを10にして1個ずつ売ります。また、プロジェクトのドローイングを売ることもあります。

先ほど紹介した長谷川愛さんのようなケースは、おそらく作品を売るというのは難しいので、売る相手として考えやすいのは、やはり美術館ですね。それも多分エディションにします。例えば東京都現代美術館が世界に1点しかない作品を持つというようなことは、アーティストにとっては得策ではありません。ニューヨークのMoMaやロンドンのテートギャラリーなど、自分の作品が色々な人の目に触れることを想定して、できれば入場者が多いところ、オープンなところ、そういうところにそれぞれ買っていただくように考えます。

けれども、それだけでは食べていけません。長谷川さんのようなアーティストは、企業や教育機関と一緒にいろいろなプロジェクトを作って、それをビジュアライズして研究や発想を進め、それに対してギャランティをいただくということが正当な評価ではないかと思うんですね。これからのアーティストは、単に絵を描いて完成させて何かをするのではなく、むしろ考え方という言葉にできなかったものをビジュアル化して、平面だろうが立体だろうが映像だろうが、みんなにわかるように見せることができる人、ということになっていくのではないかなと。スペキュラティブ・アートは、その過渡期のなかのひとつではないかと思います。

**Q3:** 企業の中にアーティストを取り入れるという先行事例はありますか？

**山口:** 今、経営コンサルタントの方と一緒にやろうとしているプロジェクトのひとつに、企業の会議室に若いアーティストの大きな作品を貸し出すというものがあります。例えば、美術館のグループ展などに呼ばれてつくった大きな作品を、展覧会終了後に、持って帰らなけ

ればいけないんですね。それが入るような大きなアトリエがない場合、みんなで倉庫を借りて置いてあるわけですよ。それなら会議室に貸し出せばいい、ということになって、経営コンサルタントの人に話をしたら、それは明日にでもできる話ですね、ということになったわけです。定期的に作品を入れ替えて、気に入ったら買っていただくことも視野に入れる。レンタル費は格安になると思うので、途中で購入に切り換えれば、20回の分割ぐらいで全部払い終わりますし、そのまま貸し出しルートに乗せてグルグル回してもいいと思っています。何より経営者の方が「応援しているんだよ」と言っていただくことで、ムーブメントが起こればいいなあ、と思っています。

**関**：山口さん、みなさん、ありがとうございました。

以上

2017年度 第6回物学研究会レポート  
「日本の現代アート事情 — ヴェネツィア、  
カッセル、ミュンスターを巡って思うこと」

山口裕美氏

(アートプロデューサー、YY ARTS 代表)

---

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2017 BUTSUGAKU Research Institute.